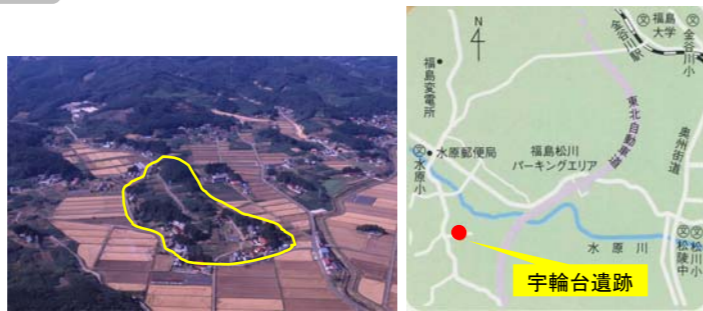


シリーズ 福島市の縄文遺跡

第7回 宇輪台遺跡(松川町)

松川町水原字右輪台に位置しています。通常、遺跡名は字名がつけられるのが一般的ですが、字名と遺跡名が違う珍しい事例です。昔から土器や矢じりが拾える場所として知られていましたが、これまでに2度の発掘調査が行われ、縄文時代前期(約5,500年前)と中期(約4,500年前)に集落が営まれていたことがわかりました。



縄文時代前期の集落は東北地方南部でも数少ないため、非常に貴重な発見です。前期の竪穴住居は長方形の形をしており、通常のサイズの住居(長さ4m、幅3m)のほかに、大型住居(長さ約10m、幅4m)が見つっています。大型住居は普通の住まいではなく、集落の縄文人が集まる集会所や共同の作業場と考えられています。



▲土偶(大きさタテ5.5cm)



▲発掘調査の航空写真(下段)と大形住居(上段)

また、市内では最も古い前期の土偶も見つっていますが、顔の部分はへこんだだけの簡単な表現です。

▲土偶(大きさタテ5.5cm)

★★ 次回は、富山遺跡(町庭坂)を紹介します。おたのしみに。★★

用語解説

「アングイン」

アングイン(編布)は、縄文時代に存在したと考えられる最も単純な古い編み方で作られた布の呼称です。

アングイン台と呼ばれる木製の台を使って、植物の繊維(カラムシや麻)を素材にして、縄文人は、衣服やカゴなどを編んでいたようです。



アングイン台(左)と完成したアングイン編みの布地(右)

「土偶」

土偶は、縄文人が作成した粘土製の土人形で、胸やお腹が大きな表現をしているものも多く、出産のためのお守りとも言われています。

旧石器時代の土偶は見つかりませんが、今から約12,000年前の縄文時代草創期の土偶が、三重県や滋賀県で見つっています。草創期の土偶には顔の表現はありませんが、大きな胸が表現されています。



草創期の土偶(相谷熊原遺跡・三重県)▲

編集後記

じょーもぴあ宮畑の一年間を振り返った時、まず筆頭に上げられるのが、「じょーもぴあ宮畑サポートネットワーク」が「じょーもぴあ・遺跡の案内人」「じょーもぴあ活用推進協議会」という2つの新組織に生まれ変わり、力強い活動を開始したこと、史跡公園の除染工事が実施されたことです。

平成25年度からは体験学習施設の建設が開始される予定で、史跡公園の開園に向け新たな意欲が湧いてくるように感じる今日この頃です。

市民の皆様のより一層のご協力をお願いしたいと考えています。

国史跡 宮畑遺跡

みや はた だより 第8号 平成25年3月



じょーもぴあ 宮畑

発行：じょーもぴあ・遺跡の案内人
編集：じょーもぴあ・遺跡の案内人
だより編集班

事務局：福島市教育委員会 文化課
〒960-8601 福島市五老内町3番1号
☎024-535-1111 内線5375・5376

★「じょーもぴあ」とは「縄文時代を身近に感じられるユートピアのような場所」の意味です。

整備の様子をのぞいてみよう 第6回

じょーもぴあ宮畑の除染工事を進めています

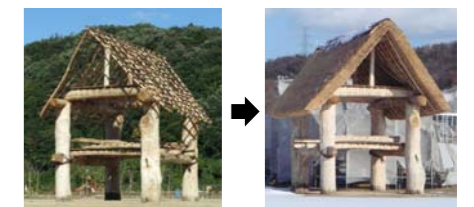
平成24年8月から、じょーもぴあ宮畑園内の除染工事を行っており、平成25年3月には、園内の全域が除染完了となります。

園内は、市内の学校や公園と同様に、表土5cm・芝生の除去、園路・樹木等の高圧洗浄を行っています。また、復元建物の茅屋根の撤去と葺き替えも行います。

汚染土は敷地外に搬出することができないため、園内に遺跡の面に達しない深さの埋設坑を掘り埋設しています。これらの除染工事により、除染前は1.5マイクロシーベルト程度あった空間放射線測定値が、除染後には0.2~0.3マイクロシーベルト程度に減少しています。



汚染土は園内に埋設しています



除染中

除染完了

竪穴住居の復元をしました

縄文時代中期(約4,500年前)の縄文人たちが暮らした竪穴住居を復元しました。発掘調査で竪穴住居の屋根は茅葺きではなく、屋根の上に土をのせた土屋根だったことがわかっています。

竪穴住居に使われている木材は全てクリの木で、中心的な柱には直径10~20cmの木材を用い、屋根支えの垂木を含めると100本以上のクリの木を使っています。



①湿気防止のためコンクリートの基礎を敷いています



②主柱を建てます



③屋根支えの垂木をかけます



④土屋根を支えるため、下地の樹皮を敷きます



⑤、⑥土をのせ、土屋根を仕上げて完成です



じょーもぴあ宮畑の環境放射線測定値

じょーもぴあ宮畑は現在除染工事中です。除染工事は平成25年3月に完了予定です。

除染工事中(2/1)：0.26マイクロシーベルト/時間 ← 除染工事前(9/4)：1.52マイクロシーベルト/時間(芝生の広場、地上1m)

特集 宮畑遺跡この一年

平成24年度は、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故の影響により、じょーもぴあ宮畑の除染工事が行われているため、じょーもぴあ宮畑を舞台とした活動は自粛しましたが、じょーもぴあ・遺跡の案内人では、一般市民を対象としたワークショップの開催、縄文探検隊や地区行事での縄文体験サポート、スキルアップ研修の実施などを行いました。また、じょーもぴあ活用推進協議会では平成25年度の地区行事、わくわくイベント開催に向けた会議、グッズ製作の検討会を開催しました。

《平成24年度の主な活動》

5月	じょーもぴあ・遺跡の案内人設立総会	11月	仙台市ボランティアとの交流会
7月	縄文探検隊（～10月） じょーもぴあ宮畑自然観察会 視察研修（郡山市、白河市） じょーもぴあ活用推進協議会設立総会		スキルアップ研修「福島の歴史と文化」（～3月、計5回） 公開講演会 「縄文時代の植物利用とアングイン編み」 講師：佐藤信之氏（新潟県津南町）
8月	案内ガイド研修開始（～11月、計5回） じょーもぴあ・遺跡の案内人新規会員募集		市民活用委員会開催（～3月） 東部・大波活用委員会開催（～3月）
10月	地区行事等での縄文体験サポート 新規会員研修（～12月、計3回）	1月	ワークショップ「アングイン編み講座」（～3月）

※この他に、じょーもぴあ宮畑だよりの発行（8月、11月、3月）
「縄文の文化誌」にかかる活動（9月～12月、次頁参照）を実施しました。

じょーもぴあ・遺跡の案内人



▲7月 自然観察会
県植物研究会の五十嵐会長を講師に除染前の園内の植物を観察しました。



▲7月 先進地の視察研修
郡山市の大安場古墳等の視察見学を行い、ボランティアとの意見交換をしました。



▲10月 縄文体験サポート
地区文化祭や縄文探検隊で勾玉作りや弓矢体験等の補助をしました。



▲11月 仙台市ボランティアとの交流会
「地底の森ミュージアム」「仙台市縄文の森広場」のボランティア約50名がじょーもぴあ宮畑を訪れました。



▲12月 新規会員説明会
8名の新規会員が新たに加わり、平成25年度も新規会員を募集予定です。



▲7月～3月 スキルアップ研修
「縄文の文化誌」「福島の歴史と文化」「案内ガイド研修」等を実施しました。



▲市民活用委員会では、大学生も参加し、活用事業を検討しています。



▲平成23年度のグッズ試作品
・ハンドタオル(上段)
・缶バッチ(下段)

じょーもぴあ活用推進協議会

- 東部・大波活用委員会
平成25年度の地区行事、じょーもぴあ宮畑を利用した活用事業を検討しています。
- 市民活用委員会
平成25年度のわくわくイベントの企画、グッズ製作の検討会を開催しています。

じょーもぴあ・遺跡の案内人の活動紹介

「縄文の文化誌」に関わる活動

平成24年度のじょーもぴあ・遺跡の案内人では、「縄文の文化誌」として、縄文時代の衣食住の「衣」に焦点をあて、各種研修、公開講演会、縄文ワークショップ等を実施しました。

○茂庭地区のシナダ織り（10月）



▲シナダ織りの布地

福島市の茂庭地区で、昭和30年代まで行われていたシナダの木の樹皮を使った「シナダ織り」について、市内の佐藤和子さんを講師にお話を聞きました。

○公開講演会（11月）

一般市民を対象とした講演会として、新潟県津南町から講師をお迎えし、津南町での「アングイン編み」の再発見にいたる歴史、地域での取り組みについて講演をいただきました。



▲講師の佐藤信之さん
(津南町教育委員会)

○アングイン編み練習（12月）

縄文ワークショップの準備のため、案内人の会員も1週間にわたりアングイン編みの練習をしました。



▲木製の台がアングイン台です。

○縄文ワークショップ「アングイン編み講座」（1～3月）

全3回の講座を実施し、約20名の参加者がアングイン編みによりコースターやランチョンマットを製作しました。



縄文人も手編みで布を作っていたんですね。慣れるまでは大変ですね。

宮畑遺跡の発掘から整備まで

第6回「平成9年度の調査③」

平成9年度に福島工業団地の第6期工事ともなって実施された、宮畑遺跡の3次調査の成果について、連載3回目の今回は縄文時代晩期の掘立柱建物と埋甕を取り上げます。

縄文時代の建物跡と言えれば竪穴住居が一般的ですが、それ以外に「掘立柱建物」とよばれる建物があります。掘立柱建物は地面に穴を掘りくぼめて、そのまま柱（掘立柱）を建てた建物で、遺跡によって建物の使われ方は異なり、住居、倉庫、共同の作業場、物見やぐら、まつり等に使われた施設と考えられています。

宮畑遺跡で見つかった最も大きな掘立柱建物は4本の柱の建物で、柱の直径は70～90cmもあります。柱を建てるために掘られた穴は直径2m、深さ2mで、大人がすっぽり入るほどの大きさでした。

この建物はその規模から、宮畑遺跡のシンボリックな建物と考えられます。また、縄文時代を通じても東日本では最大級の柱が使われていたことがわかっています。



▲宮畑遺跡の最大の発見「直径90cmの柱の痕」

埋甕は縄文時代にみられる子供の墓で、主に乳幼児を縄文土器に納めたのちに埋葬するものです。

縄文時代中期（約5,000年前）から存在し、市内の中期の遺跡では和台遺跡、月崎A遺跡、愛宕原遺跡や茂庭地区の遺跡などでも見つかっています。

宮畑遺跡の3次調査では、縄文時代晩期（約3,000年前）を中心に、屋外埋甕としては市内で最多の98基の埋甕が確認されています。また、中には一箇所にまとまって埋められているものもありました。